We are 46期

中・高6年間、そこには常にサッカーをしている自分がいた

相澤隆寛
赤木龍一郎
秋山栄一
石橋　高
碓井真吾
太田良隆
大橋　豪
大村拓也
小倉誉大
竹井　充
長屋嘉明
布　　央
林　立平
水野暢人
森　敏和
吉村修司

6年

太田良隆

高校を卒業してから、3年近く経ったが、栄光にいたときのことは昨日のことのようによく覚えている。思えばいろんなことがあった。

中学時代は、ディフェンスの練習ばかり。おかげでチームのディフェンス力は上がったが、スライディングの練習がよくあったので、太ももの裏に切り傷がたえなかった。チームの中心であったキーパーがひょんなことから転部をしていったりした。個人的には、肉離れや足の指の脱臼など、けがによく見舞われ、苦難の時期であった。

高校に入ってからは、強い高校と対戦し、敗れていったことをよく覚えている。45、46期が中心となった初めての大会では、東高校になすすべもなく敗れた。45期の引退試合となった翠嵐高校戦の記憶も鮮明だ。自分の引退試合でもないのに、泣いたりもした。そして、高校最後の試合となった、公式戦2度目の東高校との試合。初めて東高校と戦ったときより力の差はなかったものの負けは負け。試合が終わったあとは何も考えられなかった。

毎日毎日、朝早く学校に行き、昼も放課後も練習。生活は単調だったが、（それほど長生きしているわけでもないが）今までの人生で一番充実していた、本当にいろんなことがあった。平凡な毎日を非凡に過ごしていた。

けれども、すべての部員が充実した部活をしていたわけではないことはわかっている。事実、中学1年時、サッカー部に30人近くが入部した。しかし、高校最後の大会で敗れ、サッカー部を引退するとき、部員として残っていたのは10人強である。

46期が主体となったチームは、公式戦において特筆すべき好成績を残していない。県予選では、2、3回戦でシード校と対戦すると姿を消してしまうような平凡なチームであった。だからといって、個人個人の実力が低かったというわけでは、決してない。現在、大学の部活、サークルでチームの中心となり、活動しているものも多数いる。

多くの部員がいなくなったのは、強くなかったからだろうか。それとも、練習が厳しかったからだろうか。また、どんな気持ちで部活に望み、そして辞めていったのだろうか。今となっては、辞めていった部員に当時のことを問いただすつもりもないので、辞めていった部員の心のうちを知ることはないだろう。ただ、自分に言えることは、栄光に通っている間、つねにサッカー部に所属していたということ、中高6年間を振り返ると、サッカーをしている自分がいて、その周りには少ないながらも仲間がいたということ。そして、そのことに満足しているということだけだ。

想い出の One Scene

東高校戦

高3夏の全国大会予選、2回戦の対戦相手は東高校だった。0対0のまま、試合は後半戦へと突入した。一進一退の攻防が続く。半ばを過ぎたころ、石橋の放ったシュートがペナルティーエリア内のディフェンダーの手に当たった。ＰＫである。キッカーは、誰が言い出すわけでもなく小倉に決まる。小倉はチームの誰からも信頼を得るプレーヤーだ。彼はゆっくりとボールをセットし、深呼吸を一つした。

東高校。それはあまりにも高い壁に思われた。ちょうどその1年前、栄光は3回戦でやはり東高校と対戦し、完敗した。強さ、速さ、高さ、正確さ、組織力、すべてにおいて勝る東高校の前に、成す術はなかった。彼らは、僕たちとは違う世界でサッカーをしていた。結局その年、東高校は神奈川県のベスト4に入った。

ところが、そんな東高校を相手に対等に戦い、先制点のチャンスまで得てしまった。「あの東に勝てる！」みんなが思った。ちょっと夢を見ているようだった。同時にそれは、キッカーの小倉にとっては、凄まじいプレッシャー以外の何物でもなかった。小倉が助走に入る。勝てる。軸足を踏み込む。東に勝てる。そして右足を振り抜く——。

結局、試合は0対2で敗れ、僕たちの最後の試合となった。しかし、涙はほとんどなかった。なぜなら、負けても満足できた唯一の試合だったから。　（石橋　高）

1996年の世相

7月　「O-157」指定法定伝染病となる
9月　国連、包括的核実験停止条約を調印
アトランタオリンピック、サッカー日本がブラジルから金星

高３最後の試合まで10数名が残ってプレーした

45期との合同チーム

主な戦績

●鎌倉市中一大会　準優勝
●選手権予選　二回戦対　東高校０―２
（高校３年生時　引退試合）

We are 47期

冬の早朝グランドに立った時の、あのキリキリとした空気を忘れない

荒井紀一郎（ＧＫ）
伊藤聡志（ＭＦ）
江浦俊彦（ＤＦ）
太田英理（ＭＦ）
片多淳一（ＦＷ）
佐藤　充（ＦＷ）
富秋直紀（ＧＫ）
塚本　修（ＤＦ）
野口将彦（ＭＦ）
森野俊哉（ＭＦ）
家崎晃司（ＭＦ）
山中健太（ＭＦ）
渡辺雄太（ＤＦ）

雪の日に……

伊藤聡志

心〝温まった〟話を一つ。

我が47期が最も活躍した大会は、99年2月に行われた湘南大会ではないだろうか。我々はベスト8進出を果たしたのである。記憶によるならば、我が栄光学園が湘南大会においてベスト8に進出するのは何年か振りであった。タレント揃いの46期と比較され、「レベルの低い」学年という印象を受けていた我が47期が残した数少ない好成績である。

99年の1月から、関東地方の週末は大雪に見舞われ湘南大会も延期に延期を重ねたが、結局雪の降るなかでの大会となった。私は雨の日用に取替式スパイクを愛用していた。二回戦当日の朝、そのスパイクを部室に置いてきたことに気付き、早めに家を出、大船駅からタクシー(勿論雪なので)で取りに行った。

タクシーで雪道を学校へ向けて走る車内でのこと。「どうしたんだい。こんな雪の日に学校へ行くなんて」——運転手さんとの会話。私は事情を話した。校門のところで待っててもらって、部室へ一目散に走る。

頼みの綱の取替え式スパイクを手に入れ、私はタクシーの所へ戻った。大船駅へと向かう車内でも、私たちの会話は絶える事が無かった。私自身のサッカー歴について。当時の湘南における高校スポーツについて。などなど。

そして大船駅に着く。メーターを見て見ると往復で1500円近い料金。高校生には厳しいなと思いながらお金を差し出した。すると運転手さんは私に1000円札を返し、「これで良いよ」と言ってくれたのである。

温まったのは、当然〝懐〟ではなく〝心〟であった。

台

渡辺雄太

何故か印象に残っているのが「台」。確かトレーニングに踏み台昇降を取り入れるとかで、そのための台を昼休みにみんなで作った。結構楽しんで作っていたような気がする。結局は使われずただのベンチになってしまった「台」を見ると、47期だけの思い出っていう感じがして、ちょっとうれしくなるのは俺だけかな。

青春

山中健太

私にとって栄光サッカー部での6年間の活動は、まさに青春そのものであったと言えます。そこには出会いがあり、喜びがあり、試練があり、そして挫折がありました。この6年間の経験がなければ今の自分は無かったであろうと思います。冬時間にもかかわらず7時半頃グラウンドに立つときの、あのキリキリとした空気は忘れません。この場を借りて、指導をしてくださった先輩、先生の方々にお礼を言いたいと思います。

雨

江浦俊彦

サッカー部はグラウンドがどんな状態でも練習をしていた。雨が降ればグラウンドはぐちゃぐちゃになり、スライディングをしようものなら体は泥だらけになった。

しかしそんな中での練習はいつもと違った楽しさがあり、わざと体を汚したりもした。サッカーはどのような環境でも楽しむことができた。

友

太田英理

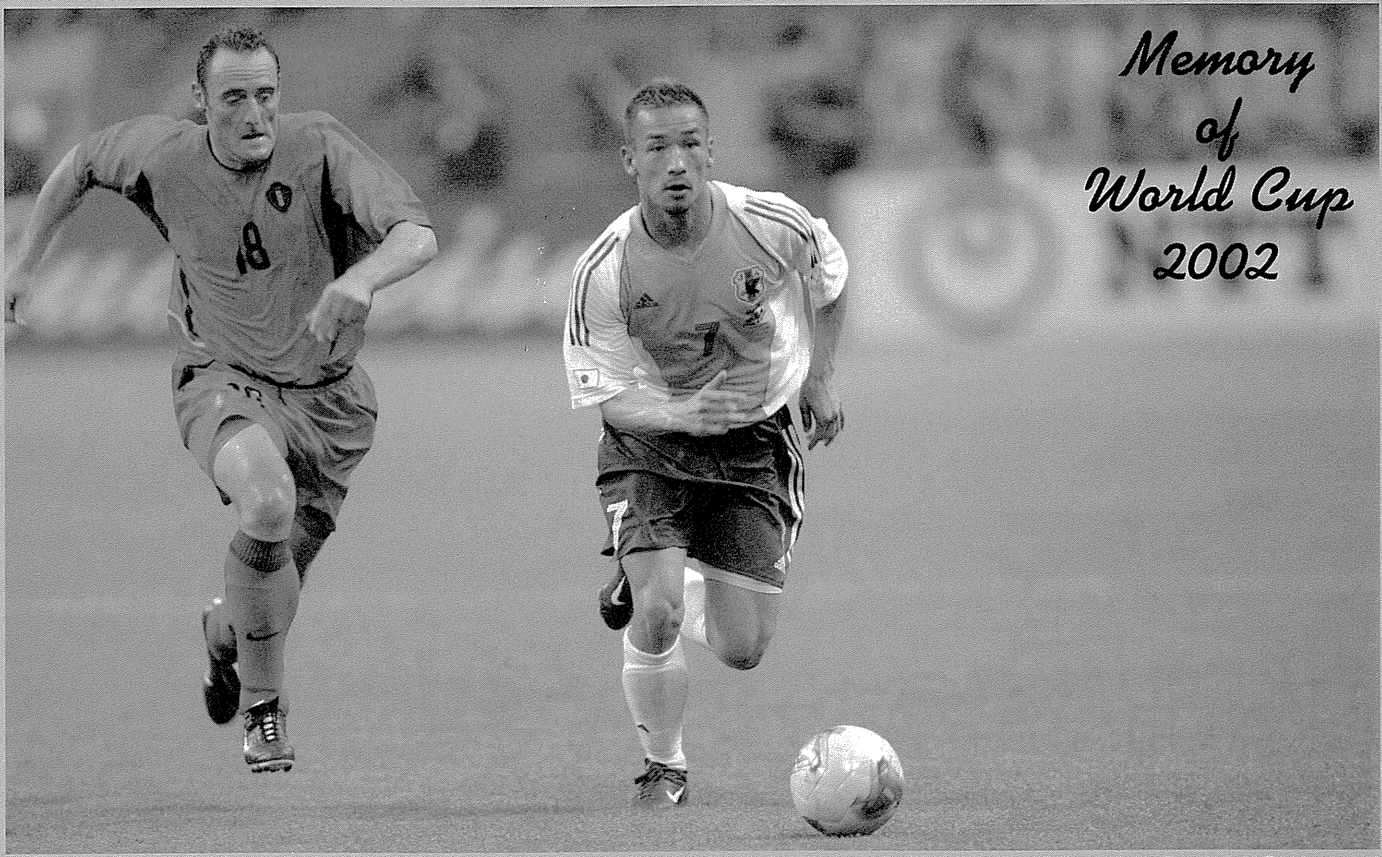
私は6年間サッカーに打ち込み続けませんでしたが、サッカーから関心が無くなったことはありません。先の日韓共催のワールドカップで熱狂し、そして4年後のドイツ大会を心待ちにしています。

大学でも友人とサッカーを楽しみ、サッカーを通じて新たに出会うことのできた友人も少なくありません。大学以外で、何かの折りに偶然サッカー部の先輩と出会うこともあります。栄光学園を卒業してから、サッカー部で過ごした時間が大変有意義なものであったと、改めて感じています。

1997年の世相

4月　ペルー日本大使公邸人質事件
7月　英国、香港を中国へ返還
11月「ジョホールバルの歓喜」

卒業記念の集合写真



ⒸJMPA

We are 48期

〝鎌倉三弱〟の一角という逆境からのスタート

- 下田悠介（GK）
- 堀江和浩（GK）
- 石井　薫（GK）
- 石田大暁（DF）
- 櫻　悠樹（DF）
- 矢野貴裕（DF）
- 青山俊輔（DF）
- 林　健一郎（DF）
- 安藤亮太（MF）
- 飯森奈央彦（MF）
- 田中潤平（MF）
- 廣田秀孝（MF）
- 結城　倫（MF）
- 木田俊介（MF）
- 上條直人（MF）
- 西脇　裕（MF）
- 岩崎　渉（MF）
- 山内浩義（MF）
- 小出晋一郎（FW）
- 高橋秀聡（FW）
- 浅沼　悠（FW）

鎌倉三弱からの転身

石田大暁

　時代は厳しかった。『鎌倉三弱』そのうちの一角に我が栄光サッカー部はいる。それが、我々48期が入部した頃の共通認識だった。こんな事を言ってしまうと偉大なる先輩の方々には怒られてしまいそうだが、誰にそんな意識を植え付けられたのか、自分たちはそんな中からのスタートだった。

　中一大会。48期が入部して最初の公式戦です。対戦相手は、永遠のライバル（と自分たちが勝手に思っているだけの）鎌倉学園。試合展開は、……あまりよくは覚えていないが、とりあえずは一進一退。0対0のまま後半も残り時間が少なくなってきました。が、そこで事件は起こりました。鎌倉学園フォワードへのロングパス、ゴール前で待っていたフォワードが胸でワントラップします。次の瞬間、トラップしたボールは彼の伸ばした腕の上をコロコロ転がり、ちょうどいいところに落ちたボールを彼シュート、ボールはゴールキーパーの頭上を越えて難なくゴールに吸い込まれていきました。

　ハンドだと思い、完全に足の止まっていた栄光ディフェンス陣、そしてゴールキーパーにはもはや防ぐすべはありません。そしてまだまだ若かったあのころ、僕たちには抗議の「こ」の字も思いつきません。ただただ審判（通称『ヒゲ』、これ以降の栄光学園の試合にも何度が登場し、そのたびに我がチームを苦しめる、とにかく相性の悪かった審判）に不平を漏らすばかり。

　結局試合はそのまま終了。『鎌倉三弱』の名に恥じぬ見事な初戦負けでありました。まだまだ事件は続きます。試合も終わり、差し入れのケーキを頬張りながら帰り支度をし、ミーティングにのぞみます。先生の話も終わり、そろそろみんな帰る心構えをしています。最後は試合を見に来ていた先輩からコメントをいただきます。しかし、その先輩（当時高2）、なにやら怒っています。非常に怒っています。試合内容が気に入らなかったのか、それとも試合に負けたことがそんなに悔しかったのか、はたまた怒ることをはなから決めていたのか、とにかく怒っています。

「何なんだ、この試合内容は！負けたのになにヘラヘラとケーキなんか食ってるんだ！」

　そして、

「だいたいおまえら、試合に対する心構えがなってない、うちの期の奴らは1週間前からメシものどを通らないくらいだぞ！」

　さらに、

「飲酒する奴だっている……」

　しかし、「おいっ!!」柴野先生のするどいツッコミがはいります。そりゃそうです。先輩、まだ高校生なのですから。

　結局そのあとその先輩はさんざん説教され、ついにはサッカー部を辞めてしまいます。となったら面白いのですが、さすがにそんなことにはならなかったらしく、「例えばの話ですよ、例えばの」という苦しい言い訳をさんざん繰り返し、何とか事なきをえたようです。いや、でも、その先輩にはそれ以降もいろいろと世話をやいていただきました。この場を借りて感謝したいくらいです。本当にありがとうございました。

　そんな先輩のゲキが功を奏してか、我が48期は、それ以降の市内大会ではいずれもベスト4入りという大躍進を見せます。それのどこが大躍進なんだ、と大先輩の方々には言われてしまいそうですが、『鎌倉三弱』であった僕たちにとってはものすごい成長ぶりだったわけです。そんな48期栄光中サッカー部にも最後の大会、湘南大会がやってきました。藤沢一中に0対2の完敗を喫した後、敗者復活をかけて戦う相手は玉縄中です。結果は……あえなく完敗。最後に負けた相手が鎌倉市内の学校という何とも皮肉な結末でありました。まあ玉縄中が強かったということにしておきましょう。せっかく『鎌倉三弱』という汚名を返上したと言ったばかりなのですから。

　というわけで、自分でも何が言いたかったのかよく分かりません。が、とにかく現役中学生、高校生諸君には頑張ってもらいたいということです。全国制覇を夢見て。そしてその第一歩になれた48期にいたことを誇りに思いながら、栄光学園サッカー部の活躍を期待しています。

1998年の世相

2月　第18回冬季オリンピック長野で開催

8月　北朝鮮、テポドン発射

W杯第16回フランス大会、地元フランス優勝

48〜49期合同チーム

©JMPA

We are 49期

無意識のうちに「チームのムード」を大事にすることが皆の不文律となっていた

井上　遼（ＦＷ）
矢島　新（ＭＦ）
島津智久（ＤＦ）
新井祥人（ＤＦ）
曽根原裕樹（ＤＦ）
富士宗一郎（ＤＦ）
田川慎一（ＭＦ）
瀬上顕貴（ＭＦ）
清末彰胤（ＦＷ）
鈴木涼祐（ＦＷ）
三冨裕騎（ＧＫ）

不思議な期

曽根原裕樹

なんとも不思議な現象が相次いだ期であったと思っている。

例えば、部員の数。中学の時に40人近くいた部員の数も、引退する時には11人しか残っていなかった。まさに、「イレブン」だけが残ったわけである。まあ、少なくなったおかげで部員どうしの関係が密になったから、チームとしてはよかったかもしれない。言いたいことをはっきりと言えたから。そして、そのことでギクシャクすることもなかったから。

例えば、フォーメーション。うちの期の高校チームのフォーメーションは最近の日本では少し珍しい4―3―3であった。ある夏休みの練習前に、部内一のサッカー好きが顧問の先生と当時4―3―3による超攻撃的サッカーを展開していたバルセロナについて語ったその日から、4―3―3となった。当然、最初のうちは結果が全くでず、何気に彼は責任を感じていたらしい。でも、最終的にはほぼ完璧に機能するようになったから誰も文句は言うまい。

例えば、朝練。恥ずかしながら、うちの期のキャプテンは朝練にはあまりというかほとんど参加しようとはしなかった。そのかわりに、「朝練部長」というポストがいつのまにかできていて、それは朝練の時だけあたかもキャプテンのようにふるまうことができるというものであったのだが、当然のことながらそんな変な習慣は受け継がれるわけもなくて、1代で消滅した。やっていた本人はまんざらでもなさそうであったのは事実。

他にも色々なことがあった。中学時代のある大会で、コーナーキックを20本近く取られ、相手のシュートの何本かはポストとかバーにあたるというほど一方的に攻められた試合があったのだが、何故か点はとられず（もちろんとれず）、延長に突入。確か延長後半だったか、キャプテンの放った「まさか」という位置からの超ロングシュートが決まって勝ってしまったという嘘のような本当の話もあるし、高校時代のピークであった湘南地区大会「チームが一丸となることの大切さを教えてくれた」などと美談として語ることができるものもある。

最後に残った11人は、それぞれが非常に強い個性を持っていて、後輩によれば「クセが強い集団」だったらしい。また、顧問の先生から「元気だけがとりえの期」などと、褒めているのか貶しているのかわからないような言葉を頂戴したこともある。両方ともあたっているので、あえて反論することはしない。しかし、49期の暗黙の了解というか不文律みたいなものになっていたことがひとつだけある。それは「チームのムードを常に良い方向にもっていく」ということだ。

サッカーをする上で忘れてならないのは、「楽しむ」ということである。へら

想い出の One Scene

ラダートレーニング

「それ」がはじめて本格的に練習に現れたのは、確か高２の冬休みであった。一見縄梯子のように見える「それ」は、何のためのものだか最初は全くわからなかった。先生によれば、ステップワークの向上をはかるための器具らしい。30㎝四方に区切られた枠から枠へ、外側から枠へなどと様々なやり方で、細かいステップを踏みながら前へと進む。「それ」はアヤックスをはじめ、多くのプロチームが使っているということだから効果がないということはないのだろう。しかし、最初のうち半信半疑でやっていたことは否定できない。

ところが３学期にはいると、「それ」は毎朝登場することになる。寒さに凍えた体を温めるのに最適であったからだ。一通りのメニューをこなすといい具合に息もあがり、スムーズにパス練、ゲームにうつることができた。当時「それ」は「からだを温める器具」それ以上でもそれ以下でもなかった。しかし、今思えば優勝した湘南地区大会時のチームの好調は「それ」が支えていたと言っていいのかもしれない。なぜなら、春が訪れ暖かくなって「それ」の姿がなくなると共に、チームの状態は下降線を辿ることになったから。真冬のグランドで湯気を体から発しながら細かいステップを踏んでいる49、50、51期の連中の姿は今だに鮮明に残っている。あの縄梯子みたいな「ラダー」とともに。

（曽根原記）

1999年の世相

1月　ＥＵ、通貨ユーロ誕生
9月　東海村で日本初の臨界事故
12月　ポルトガル、マカオを中国へ返還

中学時代には40人近い大所帯だった

湘南地区大会で優勝した高校時代

いろいろな意味で「不思議な期」だった

へらやれと言っているのでは、決してない。個人のレベルを上げるために厳しいことを言い合うのは絶対に必要であるからだ。ただ、それでチームのムードを悪くするようなことは決してやってはならない。プロチームではなく、所詮はアマチュアのチームなのだから「練習に行きたくないな」と思わせるようなムードにしてしまっては、強くなることは断じてない。部員すべてが部活動を楽しむことができるようなチームを目指す。そのことはある程度実現できたのではないかと自負している。

誇りに思っているのは49期の奴ら全員がそのことを無意識にやっていたということだ。誰かが「チームのムードを良くしよう」などと言ったことは一度もない。皆が無意識のうちにそれを実践していたことに誇りを感じるし、尊敬できる。

一見「クセが強く」て「元気」なだけに見えた奴らが、チームをまとまったものにできたというのが実は一番不思議な現象なのかもしれない。ただ、自分は49期の面子を見る限り、不思議どころか必然の結果であったと思っているのだが。

主な戦績

中学時代	鎌倉市２位（夏の大会）
高校時代	選手権予選３回戦敗退
	湘南地区大会優勝
	インターハイ予選３回戦敗退

We are 50期

引退にあたって現役の諸君に書き残しておきたいこと

岡村雅也
芝山健悟
古川翔一
岩倉洋平
金子素久
窪田　彰
古賀　勝
鈴木喜貴
森　智史
森　真治
吉田拓司

●レポートを書くにあたって

50期キャプテン　岡村雅也

僕たち50期は、中学からサッカー部員として活動してきましたが、２００１年５月13日のインターハイ予選敗退をもって休部することにしました。サッカー部には迷惑をかけるかもしれませんが、進路や受験の事などを考えた結果、このような判断をするにいたったので承知していただきたいと思います。

さて、休部するにあたって、最後に何か少しでも出来ることをしようということで、皆で話し合った結果、このレポートを書くことにしました。中学から引退するまでにサッカー部で学んだことを出来るだけ形に残そうと思い、複数の部員で書いたので、少しでもこのレポートを役立ててほしいと思います。

1．2000〜01年の流れ　（森　智史）

5月　高校総体県予選3回戦
　対茅ヶ崎北陵戦　0—2
7月下旬　全国高校サッカー選手権予選
　1回戦　対橋本高　8—0
　2回戦　対伊勢原高0—2
8月上旬　湘南サッカーフェスティバル
　A戦　1勝5敗
9月　高校部活に52期加入。『サッカーレボリューション』始まる
〜11月　新人戦地区大会　1勝3敗
　対藤嶺藤沢高　0—4
　対鎌倉高　0—1
　対藤沢工業高　2—0
　対大船高　1—2
2月　湘南地区大会
　1回戦　対大船高　0—1
2月〜　選手による計画的自主練を開始
　（例）昼休みのシュート練習。
　木曜放課後の体力トレーニングなど
3月　P.F.CUP1勝1敗1分、3位
5月　高校総体県予選
　1回戦　対相模原工技　5—1
　2回戦　対大和高　2—1
　3回戦　対戸塚高　2—0
　4回戦　対桐蔭学園高　0—5

〈感想〉

こうしてあらためて一年の流れを書き記してみると、チーム状態は常に変化しているということに気づいた。なかでも、一番大きな変化は、50期をはじめとする部員が自主性を発揮し朝・昼・夕の練習プランをたてたころだったと思う。このころから、ミーティングでも積極的な発言が目立ち、練習においても組織的プレーが確立され始めた。このことが総体県予選4回戦進出の原動力の一つであったと思う。

2．栄光vs桐蔭戦分析　（古川翔一）

失点シーンを中心に栄光DFの問題点を取り上げた。

〈2点目の問題点と改善点〉

・外から中へボールが入ったら、一人目のDFでしっかりタテを切る必要がある。そうすれば、芝山がよる必要がなくなり、ラストパスを出した選手をフリーにせずにすんだ。

・ボールにプレッシャーがあるときは、ラインを上げてもいいが、フリーなときは、前がかりになってしまうと、裏を簡単に狙われてしまう。また、相手が裏を狙ったことはシンジには見えているので、しっかりとサトシにそれを伝えるべきだ。逆サイドがしっかりカバーに入って声を出して連携を取るべきである。

〈3点目の問題点と改善点〉

・岡村はカバーに入ってしまったが、カバーはソノヤマもいたので、後ろからはさみディフェンスをした方がよい。そのことはソノヤマが声を出して伝えるべきである。そうすれば、ラストパスを出す選手へのパスをカットできるし、もしそのパスが通っても、より強いプレッシャーをかけられるだろう。

・DFのサトシ、シンジは相手中盤にボールが落とされたことで前がかりになっていたが、それによって相手の裏へのとびだしについていくことができなくなってしまった。2点目のときと重なるが、ボールにプレッシャーが完全に入っていなければ、押し上げてはいけない（簡単に裏をとられるから）。むしろ、ソノヤマがチェックに出ていって出来たスペースをカバーして、スペースを埋めるのがよかったと考えられる。

〈4点目の問題点と改善点〉

・中盤ではもっとプレッシャーをかけるべき（古川のところ）。またソノヤマも

2000年の世相

2月　グリコ森永事件、最終時効成立
シドニーオリンピック、女子マラソン高橋尚子が金メダル

2001年５月、対戸塚高校戦

確実にタテを切らないといけない。
・クボタがしっかりとタテを切って相手の攻撃をおくらせたので、戻りディフェンスをもっと頑張れば、この場面では中盤でカットできたかもしれない。
・ボランチの二人、特にこの場面では古川がフラフラとボールにつられて前へでてしまったのはよくない。ここで周りをみてグッとガマンできれば、シンジの代わりにマークにいけることになる。これも、後ろから声をかけていって確認したいところである。

〈まとめ〉
・全体的にカバー不足。→一人がアプローチしたらカバーに入るのが基本。
・戻りディフェンスが弱い。→第１ディフェンダーがしっかりたてを切っているときに、戻りディフェンスが入ればカットしやすい。
・アプローチ（プレッシャー）をもっと強くするべき。→これがないとディフェンスが後手後手となってしまう。アプローチをしっかりせずに、DFラインを押し上げて裏を狙われることも多かった。

今まで「〜ができていない」等否定的に述べてきたが、上に述べたことは部分部分ではできている場面があり、あとはそれを連続してやり続けられるか、ということが問題である。

3．実践に基くＦＷ論　（古賀　勝）

ＦＷは最前線で得点を目指すことを主とした役割で働くポジショニングである。先ず基本的なポジショニング等を軸にいくつかのプレーを整理していく。

・ポストプレー：簡単に言えば、ＦＷが中盤に「おとす」こと→攻撃に厚みができる。ボールを受けるのに必要なこと→常にボールを受けられる位置に入る。ボールを迎えにいく。視野の広がる体の向き。声を出して位置を知らせる。ＤＦとの競り合いをしっかりする。
・裏へ出る動き：ＤＦの盲点となる「スペース」にフリーで入る→そのまま点をとるチャンスとすることができる。マークを振り切ることが必要。チェック動作を入れる。緩急鋭く！　カベパス。
・プルアウェイ：外に広がりながらＤＦの視野外にうつり、ＤＦからの距離をとり、オフサイドラインを見ながらウラをねらうプレー。この際パッサーは外に広がっているからといって、外にパスをするのはあまり良くない。ウラにボールを放り込むことが良い。ウラへの動きはしばしば長い距離を走ることになるが、その割に使われることが少なかったりするが、あきらめずに走り続けることが大切。
・セットプレー：旧来のセンタリングでは、前線の選手たちは、単純にゴール前に走り込むのが普通だったが、２月18日のＯＢ戦でセンタリングの時のゴール前でのポジションチェンジを何回か試したところ、複数点を決めることができた。

以上のようなことは基本的な原則として重要ではあるがＦＷという仕事はこういうことに縛られない意表をつくプレーを目指すことが最も必要である。

例えば、ポストプレーのところで挙げた思いきってパスのようなプレー、またウラをねらうときはどれだけ意表をつくスペースに入り込むかがカギとなる。このように「発想」と「挑戦」によってＤＦと対決することが大切。

同時に重要なことは「判断力」である。上のようなプレーは有効だが、しばしばリスクが大きい。そこで最善の道をすばやく選べる能力が必要である。結果的に「判断力」のあるプレーヤーが名プレーヤーであると言えると思う。

最後に――。部活でやっているサッカーとは、「公式戦に勝つ」ためにやっているサッカーであるということをはっきり知り、その中で選手同士の心が通う瞬間、チームが一体となって目指し喜ぶというチームスポーツの醍醐味を味わっていくものである。

4．中盤総括　（芝山健悟）

・中盤の守備について
① 相手が中盤サイドに攻撃の起点をつくった時、そこにプレッシャーをかけるＭＦは「中を切りながら、縦をせばめる」が大原則。ここで簡単に中にパスを出させない。
② ①で相手がＦＷに縦パスを入れてきた時、サイドバックは「絶対に縦にいかせない」そこで時間をかけさせた後、①でプレッシャーをかけたＭＦは戻りながら「中から」プレッシャーをかける。

①、②が大原則だが、これを70分間やり通すことは簡単ではない。また、状況によっては②の場面でＭＦが戻りきれない時はＤＭＳがプレッシャーに行く場面も多いが、そのとき中盤の中のスペースは必ず、ＯＭＦか逆サイドハーフがカバーする。

・中盤の攻撃について
前年度の４―３―３では攻撃の起点がサイドの高い位置につくれたのに対し、４―４―２ではなかなか相手のサイドの裏を使うことができず苦労した。このシステムでは、ＤＦラインからしっかり全体を押し上げなければ効果的な攻めができないが、それができたら厚みのある攻めができる。

基本的に「中盤でサイドバックがボールを持った時」に起点がそこにできる。そこからＦＷへのくさび、前を向けたらサイドハーフへのパス、さらに逆サイドのＤＦラインの裏へのパスが可能になる。総体予選では、そこからサイドバックやサイドハーフが相手のコーナーフラッグ辺りのスペースを使うことができた。

5．1対1とボールの受け方（岩倉洋平）

僕たち50期は5月のインターハイを目標に、49期が引退した後、1年間様々なことに取り組んできた。夏の選手権予選や秋の新人戦ではあまり成果はでなかったものの、目標のインターハイでは4回戦進出というそれなりの成果をあげることができた。

・1対1について：今AからBにボールが出た場合、DFのCは、OFのBと1対1となる。この時OFのBは勝負するかそれともパスをするかの判断の速さを速くする。この判断が遅れると他のDFが戻ってきてしまい、DFが楽になってしまう。それに対してDFのCはOFのBに時間をかけさせる。そのためにはまず、タテをきり、相手が中に切れ込んできても、対応することができるステップをすることが重要。そうやってOFに時間をかけさせれば、スキをみてボールを奪うことができる。

・ボールの受け方とポジショニングについて：Aがボールをもっている場合を考えてみる。その場合B・Cはライン上までめいいっぱいひらき、またAと角度をつけて、サポートする。（この時BとCはコートの逆側まで見えるように、体の向きをとり、またボールの受け方（Bは右、Cは左）にも注意する。）それに対してDはDFの間をねらうようにして、サポートする。またボールがAからB、C、Dに渡った場合でも、同じようにサポートする。

6．DFラインの攻防　（窪田　彰）

①　1対1における基本事項

・まずは、インターセプトをねらう、その際、むやみなツッコミディフェンスにならないようにする。

・相手にパスがわたり、その相手が後ろを向いている時は、前を向かせないようにする。その際、ベッタリつかないようにして、適度な間を空けてディフェンス。

また、ここで大切なことは、あくまでボールを奪うことが目的だから、ただ単に、後ろを向かせないだけのぬるいディフェンスをしないこと。

・相手に前を向かれて1対1の時は、まず、半身になって、ゴールをきる。その際、細かいステップで、相手のボールタッチとともに、地に1度足をつけることも必要である。もし、抜かれた場合は必ず後ろから追っていくこと。

②　ラインディフェンス

・ボールをディフェンスラインでカットして、前線にクリアした時、ディフェンスラインには、ストッパーを中心にラインをすばやく上げる。

・相手がボールを持っている時、プレッシャーがかかっていればラインは下げなくてよい。この時、自分のマークする相手に裏をとられないようによく見ておく。そして、ボールが相手のフォワードにあてられたら、ラインを崩してしぼる。

③　ディフェンスラインからの攻撃の組み立て

まず、ストッパーはボールを持って、攻撃を組み立てようとするなら、すぐサイドバックに渡す。サイドバックはあらかじめ、開いておいて、ボールをもらう前に前方のあたりを視野に入れておく。サイドバックにボールが渡る前くらいに声を出して、サイドハーフ、オフェンシブ、フォワードはサイドバックが前を向けたら、ボールをもらいにパスコースを作りに行く。サイドバックは、ダイレクトかツータッチでボールを出し、次のプレイの準備をする。その際、サイドハーフもフォワードも、オフェンシブもサイドバックも『ボールをもらった後、又はボールを出した後、次はこうしよう』という第2の予測をして、プレイを行っていくと、パステンポも上がるし、攻めのバリエーションも増える。

7．DF総括　（森　真治）

栄光は現在、4人のラインディフェンスで固定している。スイーパーシステムと違い、カバーは4人がお互いに支え合わなければならない。また、ラインディフェンスの特色をより活かすため、ラインを4人でそろえてはっきりと前後させる必要がある。そのためには、プレー前には4人とディフェンシブハーフなどで相談し、また何よりも、試合中の声が何より大きな役割を占める。中途半端に声を出してラインを乱れさせては元も子もないので、はっきりと自信を持って指示を出さなければならない。そのため、普段の練習から声を出し慣れておくのが、試合に挑む前提である。

ディフェンスラインが安定しないとチームがしまらない。そう考えて3月の頃からディフェンスの意識を改めて考え直した。まず、ラインを上げる状況だ。ただ感覚で上げるのではなく、FWがアプローチして敵がコントロールしきれていない時は上げる。できればセンターサークル付近まで上げるように心掛けた。パスなどで敵が前を向いてボールを持てば上げるのを止め、大きな展開に警戒する。これは声をかけてからでは瞬時に判断ができないため、ディフェンスが一人一人自らの意志で上げ下げ出来るよう練習をくり返した。

ラインディフェンスは、きたえれば着実に安定感が増すものである。今年は春頃からきっちり意識して訓練したが、大分形が理解されてきたので、早目にラインの上げ下げを練習をすれば、失点を最小限に止められるだろう。

桐蔭戦では5失点を許したが、初めの3点はディフェンスがまとまりきれてない間にとられたものである。前半10分以降のように落ち着いて声をかけあえばそう失点はしないのだ。あとはDFとMFがマークの指示をし合い、シュートコースは確実にふさぐ、こぼれ球は即座に処理する。など基本を忠実に繰り返すのみだと思う。クリアボールもできればFWに当てる、もしくは前線のスペースに放り込むなど、できるだけ安全に処理することが重要だ。

8．GK編　（金子素久）

・スムーズなキャッチングを行うためには、その前の段階である「構え」をしっかりしなくてはならない。いつも言われることなので、大体分かっていると思う。ここでは、そのときの手の形について一

49期・50期チーム、湘南地区大会優勝

言。まず、手を開くというのは絶対にしなければならない。で、手を横にする（いわゆるチョップの形）か、下に向けるかだが、僕は好きな方でいいと思う。どちらもキャッチにいくまでの時間に変わりはないと思うからだ。僕は、手を開いたまま下に向け、親指と人差し指を前に突き出すようにして構えていた。そうするとボールの威力を吸収しやすいからだ。

・ポジショニングは常に、全体のバランスを見ながら確認すること。僕はかなり前に出るタイプだったが、これは諸刃の剣なので、あまりオススメはしない。

・シュートを打たれそうな時は2つ目で書いたことプラス前傾姿勢。これ基本。

・相手がボールをキープしている状態での1対1を止めに行くときは、倒れ込んでいかないこと。ある程度のレベルのチームだと簡単にかわされてしまう。（桐蔭戦の1点目）前傾姿勢を保ったまま我慢できるか、が勝負の分かれ目だ。

・ディフェンスとの声の掛け合いをしっかり。ボールの処理の決定権はキーパーにある。また、一度出ると決めたら絶対に引かない。中途半端だとディフェンスもやりにくい。

・指示はなるべく具体的に。マークの指示なども「誰が何番につくか」まで伝えられるのが望ましい。

・キーパーの声が止まると、全体の声が止まる。このことを常に意識して、みんなの集中力の持続を図る。これができないと、相模原工技戦のような失点をする。

・攻め込まれているときこそ、逆サイドやラインを見て、指示を出す余裕をわすれないこと。これができていれば、桐蔭戦の3点目はオフサイドだったかも。

9．チームとしての課題　（岡村雅也）

今まで、桐蔭戦分析や、それぞれのポジション別にいろいろな事を書いてきたが、戦術面の他にも、チームとしての問題はあると思うし、考えてほしい事もあるので、僕はそういった点について書こうと思う。

① 自覚

まず言いたいのは、「チームの一員としての自覚」。これを1人1人が持つことが一番大切である。持つことというより、自然に持ってほしい。僕はキャプテンとして、チームのことはいつも考えてきたつもりだが、チームの全員が常にサッカー部の事を考えられるというのが一番良い。どれだけチームの事を考えられるか？細かい事でいいと思う。例えば、早くコートに出てボールを出しておく、練習メニューがわかったら、すぐにコーン等を取りに行くなどといった事だ。ただ、少し厳しい話になるが、今のサッカー部では、やはり、そのように行動できる人がかたよっていると思う。いつも同じ人がコートを作っている間に、同じ人が適当に話をして待っているというのは良くない。ただ、これは1人1人が自覚するしかないので、1人1人が自分の事をよく考えてほしい。

今、1人1人が自覚するしかないと言ったが、そうするには「自分から動くこと」が必要だ。誰でも言われれば動くが、それではダメなのだ。これから部活をやっていくうえで一回やってほしいのは、自分がキャプテンのつもりで、その部活に参加するということだ。自分がまとめなきゃいけないと思うと、自然と、自分から動かざるを得ない。声を出したり、準備したり、などなど。そして、その事を次の部活から生かしてみてほしい。それから、「自分から……」というのは、練習の中においても大切な事だ。練習を「先生からやらされている」という風に感じているなら、それはよくない。

② 集中力

2つ目の課題として挙げたいのは「集中力」だ。限られた時間の中で活動している栄光サッカー部にとって、個人個人が集中力をもって練習に取り組む事が不可欠だと思う。あまり意識していない人もいるかもしれないが、この事は本当に重要だと五年間サッカーを続けてきてわかった。アップの時にやる2人組のパス練でも、集中してやれば、ただ体をほぐすだけでなく、れっきとした練習になる。パスを受ける時に試合での局面を想定して、トラップするなど、いろいろ考えるだけでだいぶ違うと思う。また集中するというのは、先生の話を聞く時なども必要だ。部活の時、よく集合して、先生が手本をみせることがあるが、そういう時に話を聞いていないような人が時々いる。練習の目的を説明しているのに、それを理解せずに練習しても意味がない。

③ 最後に

最後に、51K、52Kに伝えたいのは、「高いレベルを目指すこと」だ。やはり、ここまでやってきて実感したのは、1人1人が高い個人技を持っていなくても単純なプレーをしっかりやることで、かなり戦えるし、上位も十分にねらえるということだ。しっかりとプレスをかけていけばU―17の日本代表からだってボールを奪えるし、きちんとつないでいけば桐蔭が相手でもクロスをあげられる。これからの練習次第で絶対に神奈川の上位に入っていけるチームになると思うので、そう信じて頑張ってほしい。とりあえず

――打倒桐蔭！

We are 51期

サッカーにこだわり、練習を積み上げ、最高学年としてベストを尽くします

久保皓平
田草川崇康
中川竜一
堀場　庸
道浦吉寛
山内智久
白石英晶
園山洋平
長谷川宏樹
山崎翔平
若林隼二
太田禎生
千葉　創
中前　輝
樋口　諭
山崎厚郎
吉光　聡
太田康公
河村　慧
得能智高
逸見　豪

2001年の世相

9月　米同時多発テロ、ＮＹ貿易センタービル崩壊
10月　狂牛病、日本に飛び火

はじめまして、51期です

太田康公

今回の50周年記念誌を機に51期について考えてみたいと思う。

考えてみると、チームを引っ張った記憶がない。中3、高1の高校部活では、当然先輩に引っ張ってもらったし、中学の時も、そんな記憶はとんとない。50期が引退して51期が最高学年になった今でさえ。思えば、49、50期の存在の大きかったこと。それに比べてなんと頼りないんだろうと思う。フィールドに立ったら年の差なんて、と言うけれど、やっぱり僕らがチームを引っ張っていきたいのである。そんな頼りない51期だが、メンバーを紹介したい。

園山洋平　頼れるキャプテン。左足は必見。

太田禎生　傷だらけのファンタジスタ。たまに飛び出すスーパーパスが得意。

太田康公　小さくたって力持ち。年齢不詳のがんばり屋。

白石英晶　堅実なプレーでチームを支える笑顔のＤＦ。

千葉　創　豊富な運動量でグラウンドを駆けまわる元気者。

中川竜一　長い手足でゴールを守る貴公子。

中前　輝　強肩によるフィードと冷静なツッコミは51期イチ。

樋口　諭　よく走り、よく走り、よく走るチームのＡ（エース）兼お調子者。

逸見　豪　チームのブレイン。鋭い読みでゲームを創る。

道浦吉寛　右足から繰り出される強烈なキックは脅威。暴走しがちなムードメーカー。

山崎厚郎　チームを盛りたてる声の主役。everywhereそつなくこなす。

若林隼二　魅惑のワンタッチプレーヤー爽やか系。

（吉光　聡）　本当の秘密兵器。

想い出の One Scene

忘れられない試合

樋口　諭

僕の部屋の戸棚の中には写真が入っている。その中にあの日チームのみんなで撮った１枚の写真がある。僕はそれを見る度にあの苦しかった試合、チームみんなでもぎとった得点を思い出す。

５月６日対戸塚高校、その日はいつになく暑かった。チームのミーティングにも熱が入る。あと一つ勝てば夢の四回戦。雰囲気は上々だった。

いよいよキックオフ。立ち上がりから僕らはペースをつかんだ。これはいける、そんな思いが芽生えた。だがそんな思いも束の間、それはあせりに変わっていった。打てども打てどもシュートが入らないのである。そのあせりやもどかしさは時間が経つにつれて強まり、チームの歯車も狂い始めた。最初近かったはずのゴールもだんだん遠くなった。

暑さも疲労も最高に達した。後半20分、先輩に一本のパスが入った。ＤＦを振り切った先輩はちょっと遠めからシュート。ボールはネットに吸いこまれた。“ゴール”！待望の１点が入った。その瞬間苦しさや暑さは喜びに変わった。最高の気分であった。

その後ロスタイムにも追加点を入れた僕らは勝利した。あのみんなで分かちあった喜びは僕にとってかけがえのない思い出である。

「サッカーレボリューション」を目指して

逸見　豪

今、サッカー部は51・52・53期の3学年で高校チームとして練習しています。部活は水曜日と土曜日の週2日間だけですが、月曜日には定例ミーティングがあったり、朝や昼、放課後はたくさんの部員が自主的に活動するなど、部活以外にも積極的に努力しています。練習の量だけでなく質を高めることにも力を入れています。栄光では、部活は週2回、試合も月2回までなど、いろいろな制約があって、どうしても他の学校より練習時間が少なくなってしまうので、練習の質をあげることは大切なのです。

具体的に練習の様子を書きます。部活をはじめる前にはコート整備をします。これは去年からはじめた習慣で、この整

2001年にスタートした現役高校チーム

備のおかげでいいグラウンドコンディションで部活ができるようになりました。ウォーミングアップでも、ブラジル体操をまわりの人とリズムをそろえたり、体操のメニューも変えたりしました。栄光は、他のチームに比べると体力面が弱く、当たり負けることが多かったので、フィジカルトレーニングも、定期的にとりいれました。また戦術面では、ボールポゼッション（パスをまわしてボールをキープする戦術）を正確にできるように、サイドのフリーの選手を、早く見つけて、パスをつなぐことが大きな目標です。このようにチーム全体でよりよい部活をめざして、グラウンドの内でも外でも最大限努力していきますので、どうか応援をお願いします。

〃サッカーという答え〃

道浦吉寛

「お前らの中で四時までにグランドに魂持ってきた奴はいるのか!」

その言葉にぼくらは頭をガツンとなぐられたような思いがした。

一学期の期末試験も終わりスポ大のシロウト・サッカーというぬるま湯でいい気になっていたぼくらは、四時から部活にも関わらず時間をすぎてもダラダラしていた。夏休み入ってすぐの選手権予選という大きな存在を忘れていたかのようだった。先生は言った。

「楽しいだけのサッカーをするなら、試合をしてもしかたない、21日からの大会も辞退する」

その言葉にぼくらは耳を疑った。「いくらなんでもそれは……」みんながそう思った。しかし先生は本気だった。無情にも立ち去る先生。あたりは騒然となった。謝って部活をしてもらおうとする者、いくらなんでも大会辞退はないと楽観する者、帰ろうとする者……。

次の日、ぼくら51期だけで集まって話し合った。「確かに部員たちの中に温度差はある。サッカーを楽しみたいだけの人にはあきらめてもらおう」そんな結論に至った。先生に謝りに行った。緊張の時間が流れる。

「『やる気のない人にはやめてもらう』という考えではだめだ」それがぼくらの結論に対する先生の答えだった。

「じゃあ一体どうすれば…?」次の日は終業式。朝から全員で互いのやる気を確認した。その思いを先生に伝えにいく。が、またつっぱねられた。

今日中に何とかしなければならない。ぼくらは焦っていた。時間がない。明後日から大会なのだ。本当に辞退になるのだろうか。終業式の後、緊急ミーティングを開いた。重い雰囲気の中、しかしぼくらは答えに一歩一歩近づいていった。

「みんなで呼びかけ合っていこう」「プレーのいい所、悪い所を互いにいい合っていこう」この結論が出た時、時計の針は三時をまわっていた。この答えに先生もぼくらの情熱を認めてくれたようだ。

ぼくらは無事大会に出ることができた。しかし0対2で負け。ちょっとしたことから詰められて、結局点を取り返せなかった。「負ける相手じゃなかった」そんな思いが頭をよぎる。だけどぼくは思った。「このチームは強くなる」と。

やっぱ練習

園山洋平

中3の時に中学の部活を引退して、高校の部活に参加し始めた頃は不思議な感じだった。中学時代、「高校の方見てないで話を聞け!」とかなんとか言われながらも、「高校は輪になって話し合ってばっかりいるなぁ」とか「ヤバイ! あの練習ワケ分かんねー」とか多少もうすぐ入るだろう高校部活にビビッていた。

実際のところは、頑張れば何とか形になってたような気がする。が、しかし、高校の部活にはそれ以上の強者が!! 学年のカベだった。「ボールが欲しい時に声が出ない」みたいなことが多々あった。初めはほんとに困った。少なからずギクシャクした。それを自然に消し去ったのが練習だった。

結局、何が言いたいなんてことはないけど、とりあえず練習を続けていればなんとかなる! きっと、高校の戦績が残るのはこの文を書き終わってだいぶ後になるから、それまで練習を続けていればなんとかなる。気楽に自信を持ってやっていかないと、いい結果なんて出ないでしょう。良くも悪くもこうやって50周年の原稿を現役の、しかも最高学年として書いている訳だから納得いく結果を残せるように今日も練習しないと……。

We are
52期

中学最終戦で公式戦初勝利。団結力に目覚めた僕達に乞うご期待！

市村拓也
王子富登
大久保正紀
川島　慶
熊谷紳太郎
栗田健郎
坂神孝明
島田祐介
鈴木崇廉
高岸恒一郎
竹原宏明
岩澤俊弥
榎本吾郎
大竹崇文
木村篤史
島　直樹
高橋佑也
武井亮憲
田中佐智雄
針谷　拓
宗像景洋
村木　佑
渡邊隼人
北川洋大
黒本暁人
佐野智則
関　峻也
星野　修
持舘景太

2002年の世相

第17回ワールドカップ日韓共催大会開催
栄光学園サッカー部、創部50年

五十二期のこれから

川島　慶

僕達五十二期サッカー部員は、三十六人という前例にない大人数でサッカー部に入部した。

まだ全員の顔と名前も一致しない入部して間もない頃、我ら五十二期は、聖光学院とお互い中一同志で練習試合をした。栄光の大勝だった。その時、これからはじまるであろう〝栄光学園常勝伝説〟の期待に胸ふくらませていたのは、僕だけではなかったと思う。

しかし、現実は僕らの望むように進んではくれなかった。入部して四ヶ月後の一年生大会。五十二期サッカー部はウソのように惨敗した。

それから、とにかく五十二期は、公式戦で勝つことができなかった。キーパーのパントキックが、近くの味方DFに当たって入ったり、オウンゴールや試合中の仲間同士のけんかなど、試合ごとに負けの言い訳はあった。これらによって試合状況が一変したのも事実だ。でもこれらのせいではない。こういう事故をつくってしまう、そこで諦めてしまうムードが五十二期にはあった。三十六人という大人数でコミュニケーション、結束力不足なのかもしれない。部員全員がコミュニケーションをとりあえるようにならないと……。

そうこうしているうちに、中学最後の試合はやってきた。ところが、何と栄光は一勝をあげることができた。それから五十二期のムードは一気に上がった。次の試合も勝利し、次の試合で湘南大会をかけて腰越中と戦うことになった。チームが一つになれるかもしれないと僕は感じていた。

しかしこの試合でも悲劇は起こった。腰越のMFがセンターサークルを過ぎたあたりから放ったクリアのようなロングシュートは、高い弧を描き、栄光ゴールに吸い込まれた。みな目を疑った。序盤押し気味に試合を進めていた栄光はこの後ペースをつかめずに夏を終えた。一つになるのが遅すぎたのである。

それから夏休みをはさみ、五十期、五十一期と合流した。先輩達は、人数は多くはないが、とてもまとまりがあって、一人一人の意識も高く、何か圧倒されるものがあった。先輩達栄光高校サッカー部の一員になりたい、先輩達の試合に出場したい。先輩達に追い付きたいなどの思いを胸に秘め、必死に練習に励んできたが、時間はあっという間に過ぎていった。

高校総体一週間前、先輩達はこのインハイ予選を最後にと団結し、受験勉強が忙しいにも関わらず、グラウンドに足を運び、ボールを蹴っていた。これはこの時始まったことではない。僕達五十二期も中三の夏このように練習の頃から団結していればと思うと共に、先輩達と一緒にボールを蹴れることを誇りに思った。

想い出の One Scene

春季大会

鈴木崇廉

あの日は、たしか曇りだったと思う。52K春の公式戦、対戦相手は湘南学園。今まで、様々なことがあり、不安定だったティームも次第にまとまってきた段階であり、公式戦初勝利への準備は万全だった。

しかし試合のほうは、そううまくは進まない――。というパターンのまま、試合は過ぎていった。結局、0―0の同点、延長の末PK戦へともつれ込んだ。その時僕達はPK戦初体験であった。

僕は、緊張しやすい性格にもかかわらず、志願した。四番キッカー、最も重要な位置のうちの1つであろう。PK戦は、一番黒本、二番武井が二人とも、らしくないキックをし、連続ノーゴール。僕の所にまわってくる時は「これで外せば……」という場面になってしまった。審判が自分を呼び、背番号を見せる。僕は考えた、「あのキーパーは動けない。だから2mずらせば必ず入るんだ」と。笛が鳴る。僕は、迷わずゴールに蹴り込んだ……つもりだった。だが、僕はボールの行方を見ることは出来なかった。ボールはゴールの中にはなかった。相手の歓声と自分達の悲嘆の声が混じる。短い、初勝利をかけた52期の夏季大会は僕の一蹴で終了した。

51、52、53期の高校現役チーム。土曜日の午後の練習風景

インハイ予選は始まった。栄光の気持ちは一つだった。栄光は一回戦、二回戦、三回戦と次々に快勝し、県優勝をしたかのような喜びようになった。このままどこまでも勝てるような気持ちに皆が酔いしれていたと思う。

四回戦、桐光学園会場、スタジアムのようなグラウンドに入るだけで、胸がはりさけそうな緊張を隠し切れなかった。しかも、迎える対戦校は、のちに県優勝を果たす桐蔭学園である。快進撃を続けて波に乗っていた栄光も、日本代表選手も所属する桐蔭の貫祿に押され、試合は序盤から一方的な展開になった。後半途中から出場した僕も、ただピッチに入り、嵐のように攻めてくる桐蔭に、何も考えられずに試合は終わってしまった。

試合には負けてしまったが、先輩達が築いたチームは、本当にこれからも残った僕達が続けていくべきチームだと思った。

ゴールネットを揺るがすことはできなかったが、桐蔭の鉄壁のDFを幾度となく崩しシュートを何度も打てたことは、誇れることだと思う。中三の時五十二期に足りなかったものは、「一つの目標の為にみんなが気持ちをあわせてそれに向けて必死に練習すること」だと、このインハイを通じて僕は思った。先輩が、「打倒桐蔭」という非常に大きな目標を残してくれたので、それに向けて五十二期も、人数は多いが先輩達のように全員でコミュニケーションをとりあって頑張っていきたい。そして今残った部員全員で卒団したい。

勝てなかったチーム

栗田健郎

ぼく達の中学時代は、はっきり言って弱小チームだった。公式戦では一年生の大会から考えると七連敗。練習試合でもそんなに勝てるチームではなかった。最大の原因は何か？　技術の不足、トレーニング不足、などもあげることができるが、やはり、チームのムードの悪さに尽きるだろう。普段の部活の時は、別にムードが悪いワケではなかったのだが、どうも試合になるとおかしくなる。どんなに攻めている試合でも、点を取られるとムードが一転し、負けるチームの顔を出してしまう。そしてまた点を取られムードが悪くなり、そしてまた……気が付けば、防戦一方の三点差、という感じだ。

最後の大会を迎えた。負けたら終わりの大事な一戦。この試合はラッキーな事にうちが先制した。しかしまだ油断はできない。一点でも取られるといつもの二の舞になってしまう。ぼく達は守りに守った。そしてさらに点を重ね、二—〇。さすがに相手もあせっているのがわかった。試合終了。ぼく達は見事に公式戦初白星をあげた。

ついに湘南大会進出をかけた試合へとコマを進めたのだった。みんな頑張って走った。しかし残念な事に〇—二負。湘南大会に行くことはできなかった。でもこの試合は失点をしたものの、悪いムードにならなかった。ぼく達は最後に最大の弱点を克服したのだった。

We are 53期

これからの50年、栄光サッカー部の歴史は君たちから始まる

佐治逸郎
高橋悠一郎
安藤　洵
崔　炳日
内藤卓未
中田　尚
山田啓迪
河内優太
清尾勇哉
山中　剛
鏡田　聡
佐々木裕馬
菅原英剛
中村祐輝
新倉雄大
半田育弘

キャプテンをやって

内藤卓未

僕は、中学2年の秋から中学最後の大会に至るまで、53期のキャプテンをやっていました。

もともと53期のキャプテンは交代制で僕になるまでに3人のキャプテンを経ていました。キャプテンになった仲間達がみんな口をそろえて言っていたのは「この学年はまとまりがない」という事で、それが僕にとっても少なからずプレッシャーとなり、不安を感じていた事は事実です。ですから、僕にとって最初の目標は、まとまりのあるチーム作りでした。

しかし、変人ぞろいというか個性派ぞろいというか（もちろん僕の力不足も大きいでしょうが）、てんでチームはまとまらず、あっというまに最後の大会の1ヵ月前になっていました。僕はあせりました。

ところが、です。大会がだんだんと近づいて来るにつれて誰に何をいわれた訳でもないのですが、急速にチームがまとまり始めたのです。今までは何かと人に言われなければ動かなかった連中が、自分から積極的に練習に参加し、後片付けをしてチームに貢献し始めたのです。

結局、最後の大会は初戦で敗退してしまいました。けれども、みんなでまとまれたというこの体験を自信として胸に刻み、これからも頑張っていきたいと思います。

怪我

中田　尚

「ぐっ……」グラウンドに座り込んだ。

その日は先生の指導なしの練習。というより自分達だけの練習。

夏休みを終え、秋の大会に向けてのミーティングで、先生の指導抜きで自分達だけですべてを考えて練習しようという意見があがった。賛成者もいて、その意見を採用してみることにした。僕も賛成だった。

しかし、それは結果的に失敗だった。目標だった「楽しく悠々と」が、無駄な時間の多いサッカーに集中できない「オフザケ」になり、意味なく長々とやる部活になってしまった。

そしてそれに気付き始めた矢先、それは来た。右の腰から太股の付け根にかけての激痛。歩くどころか立っていることもできなかった。オーバーワークによる炎症だった。ろくに休憩をとらず動き続けたせいで、運動への知識のなさを後悔した。

しかしそれも手遅れだった。それから僕は怪我の治療で半年以上を費やすことになる。その半年の間に中学最高学年として出場した大会は秋・冬・春と三回行われた。

予選落ちした時のことも、PK負けしたことも覚えてはいるが、そのことへの悔しさより、その悔しさの半分も感じられない自分へのいら立ち、先を考えず行動し自業自得の結果となったことへの悔やしさの方がはるかに大きかったことがいまだに忘れられない。

夏の大会

清尾勇哉

まさに、ぼくら中3にとって最後の大会だった。初戦は強豪の岩瀬中。相手の選手の動きは良く、序盤から鋭い攻撃を仕掛けてきた。その激しい攻撃についに栄光のディフェンス陣の集中が切れ、油断してしまった。先制点は岩瀬。

栄光は1点を追いかける形となった。

しかし、その後は栄光が優勢となり、チャンスをたびたび作った。有澤と高橋のコンビも、よく機能していて、特に有澤のロングパスがさえわたり、決定的なシーンもあったが、なかなか点が入らない。しかし前半残り8分、山中が出したスルーパスを高橋がセンタリングで折り返し、中田が合わせてゴール！

後半に向けて、精神的に優位に立つことができた。そして後半、一進一退の攻防が続く。両チームともモチベーションは高く保たれており、白熱した戦いとなった。しかし時計の針が進むにつれて、栄光がリズムをつかみはじめる。中田が

集合写真のベストショットかも？（編集部注）

ようやくチームにまとまりが

決定的な場面でシュートを何度か放ったが、全てキーパーにはじかれる。そうこうしているうちに岩瀬がCKからあっというまに決勝点を決める。残り4分だった。

2回戦の御成戦、前の試合の負けが効いたのか、栄光はいいところなく0対2で完敗してしまった。チームの一人一人の気持ちがそろわなかった。敗因はまさにそれだろう。悔しかった。

最初で最後の1勝

山中　剛

それは53期の初めての大会、1年生大会での対附属中学校との試合だった。僕は試合前に腹痛をおこし便所に行き帰ってくると試合が始まっているという珍事にみまわれ、後半からの出場になってしまった。

そしてその終盤、名誉挽回のチャンスにも恵まれず、1―1のまま後半を終えようとしたその時、思いがけない所からチャンスはきた。うまく説明できないが、スローインからのボールで、なぜかキーパーと1対1になったのだ。思いがけないチャンスに僕は夢中でボールに飛びこんだ……。

1年生大会、栄光は初戦の御成中と引き分けた。2戦目は初勝利とともにリーグ1位をかけての岩瀬中との戦いだった。ここで栄光は2点差を追いつくなど善戦はするが、結局3―4で惜しくも敗れた。しかし、総得点の関係で御成中の上を行き、なんとか初勝利の夢を2位リーグでの戦いにつなげた。そんな気合の入った2位リーグでの初戦が、この附属中との試合であった。

僕は夢中でボールに飛びこんだ。キーパーがでてくる。しかしかまわずつっこんだ。ボールが頭にあたる。僕は一瞬見失った。ボールは……ゴールだ!

結局この1点が決勝点となり、53期は公式戦初勝利をあげた。しかし、これが最後の1勝だった。そのあと僕らはことごとく公式戦に負けたからだ。だからあの試合、あの1点は僕にとって忘れられない思い出になった。

We are
54・55期

ひとことメッセージ
僕の目標

50年誌"the Family of Soccer"大トリは、このピカピカの中学現役たち

54期（中学2年）

★みんなと楽しくサッカーすること　青木直人

★ドリブラーからボールをとる
ＩＭＯＮＹより背を高くする
（売れっこシンガーソングライターの）　青野

★サッカーを楽しみ、みんなにできるだけこうけんする　秋元康之

★まわりの人が見て楽しいと思えるサッカーをする　有澤　慶

★サッカーを楽しむ　和泉智也

★体力を上げる　小川昌宏

★めざせ！最強のムードメーカー　小貫大輔

★レギュラーで大会に出られるようにしたい　片倉誠悟

★ケガを治して練習に参加する　源間佳尭

★左右両利き　酒井　悠

★一試合一得点必ずする　酒井龍太郎

★レギュラーをとる　櫻井聖也

★サッカーを楽しむ　佐々木貴紀

★試合で得点をとる　得居誠也

★納得のいくプレーをする　藤澤剛太

★レギュラーをとれるようにがんばる　藤田　慎

★リフティング１００回　向井康治朗

★みんなに信頼してもらえるようなキーパーになる　山形健太朗

★サイドバックでこぼれ玉をかれいなミドルシュートで決める　山城　謙

★ＤＦの神奈川ＮＯ１を目指す　若山浩介

55期（中学1年）

★キャプテンとしての役割をしっかり果たしていきたいです　浅井政真

★試合中、落ちついてプレイするようにする　井上俊吾

★栄光学園で全国一位!!　今後遼生

★全国優勝のために、まず市大会優勝！　遠藤広樹

★仲間や友達とサッカーができて楽しいこれからもサッカー部で頑張りたいと思います　小笠原陽大

★自分が下手だから、みんなについていけるようにがんばるぞ！　尾崎士朗

★一つ一つの事を精一杯やりたい　川上　渉

★リフティングの回数を今の倍にする　菅野　亮

★ねらった所にけれるくらい正確なキックができるようになる　桐井啓成

★もっとうまくなって栄光で日本一になる　倉林孝明

★レギュラーになっていろんな試合に勝つ　小林　輝

★関東大会で優勝（全国制覇）　小林将道

★どこまでも上を目指し、うまくなりたい　斎藤祐弥

★神奈川制覇、全国制覇　佐藤祐太朗

★県大会で優勝したい!!もっとうまくなりたい!!　鈴木翔太

★技術をつけて、もっと上手になる　清野　翔

★県大会優勝　平　琢磨

★出来るだけ長く部活を続ける　高森啓明

★1年で身長を10㎝のばす　髙谷遼平

★レギュラーになる　中村祐太

★栄光のレギュラーの座をつかみ、全国優勝したい　成井貴大

★レギュラーになって試合に勝つ　福本航太

★朝練になるべく出るようにする　船越　裕

★サッカー部で両方の足で正確にけれること、そしてディフェンスをうまくすることです　前村優介

★ディフェンスをもっとうまくする。リフティングをたくさんできる様にする。ボールを持ったらもっと周りを見るようにする　八重樫　涼

★もっと技術をつける　山口隼介

★まずはレギュラー、次に全国大会出場！　吉田尚志

中学チームを任された54期

小学校での経験者も多い55期

土曜日の練習のミニゲーム

夢へ、1歩ずつ

柴野明彦（サッカー部副部長）

毎年、「あの広いグランドで思いっきりサッカーしたかった」とか、「試合に勝ちたい」、「サッカー大好き」、「サッカーが最高に楽しい」というこども達がたくさん入部してくる。この声や情熱に応えるにはどうすればよいか、栄光に勤めて以来、最も重大な課題である。

グランド全体を幅広く、深く使った本格的な試合が出来れば、「思いっきりサッカーした」と言えるのではないだろうか。今まで、可能な限り練習試合を組んで、積極的に公式戦に参加してきたのは、そのチャンスをできるだけ多く作ろうと考えたからだ。

何があっても、試合中の部員諸君は、必死に走り続けている。その顔は、集中力を保つため、堅く無表情なときが多く、時折、苦しみと悔しさにゆがんだ顔を見せる。柴野は、そんな部員諸君の顔が好きだ。多くのミスを経験し、数え切れないほど悔しい思いをしてこそ、どんな局面にも対応できるタフさと、深く考える力と、限りなく前向きな気持ちが培われると思うからだ。この十二年の間で、そんな表情がよく現れた試合の話をしたい。

特に印象に残っているのは、負けた試合ばかりだ。どれも、いい思い出だが、終了直後の選手諸君は、激しい疲労感を漂わせ、しばらくは全く声もなく、呆然として座り込んでしまうことが多かった。その姿から選手の苦しみが心に響いた。

負けた責任は、ゲームプランを立てた監督にある。そのため、負けた経験から次のチーム作りの指針を得て、チームのレベルアップを図ることが柴野の責務である。毎年、新しい部員が入ってくるので、チームのコンセプトや戦い方、システムは、少しずつ変化する。それに合わせた年間計画と練習メニューを新しく考え、トライしてきた。

今では、全員がサポートに動き、ごく基本的な技術と戦術をいかし、パスを確実につないで、サイドから攻め込む形が栄光の伝統となりつつある。さらに、選手の意識と判断力、技術、戦術を高め、全員攻撃と全員守備で、みんなの力で戦うチームを目指している。これが最も大きな夢である。

＊

①九十一年七月十一日、夏の市内大会2次トーナメント戦で手広中学と対戦した。

リーグ戦の2位同士だ。1—1で延長に入り、そのままPK戦となった。そこで敗れて、地区へ進出できなかった。スコアブックをみると、栄光は、シュート数で10対3と勝っているが、攻めきれなかったようだ。

この年の四月から、中三の四三期と中二の四四期を混ぜて試合に出場させ、やっとレギュラーが定着してきたところだった。普段の練習は、基本的に学年別にやっていたので、試合中の選手諸君は試行錯誤の連続だったと思う。集中力を高め、必死に戦ったと思う。

試合後、中三諸君は、妙に明るくみせていたが、胸の中では悔しい気持ちがあったと思う。この試合に出た中から四人が中一のコーチとなり、攻守ともに基本を重視した指導をしてくれた。

②九二年四月二六日、春の湘南地区大会1次リーグで、茅ヶ崎の松林中学、藤沢の村岡中学と対戦した。

一試合目の松林中戦は、一進一退の攻防を続けていたが、前後半とも終盤に失点し、0—2で敗れた。村岡中戦は、後半からウチがリズムをつかみ、2点先制した。しかし、またも終盤に失点を重ね、2—4で逆転負けした。

この経験から、基本的な技術や戦術を徹底するため、またねばり強く戦える力をつけるため、大会を目標とした年間計画を立てて、各練習で一つずつ課題を積み上げていく方針を打ち出した。

③九三年一〇月一一日は、茅ヶ崎の鶴嶺高校と対戦し、0—9と大敗した。

これは県新人戦の地区予選だった。この年から、高校の練習試合や公式戦も、中学の試合がなければついて行くことにした。中学と高校の一貫性を考えるためだった。この試合に出た高二と高一は、二年前にも一つのチームとして育成を試みていた。前線や中盤の選手の個人技をいかした積極的な攻撃が持ち味だった。しかし、相手のプレッシャーを受けると、パスがカットされ、繰り返しカウンター攻撃を仕掛けられた。

試合後は、皆いらいらした表情をしていた。高校生もコーチの下でチーム戦術やコンセプトをしっかり考え、一貫した指導が必要なことを強く感じた。

④九五年五月五日は、高校総体予選二回戦で、希望が丘高校と対戦した。悪天候で、グランドがひどくぬかるんでいた。

希望が丘は、中盤でボールを奪い、すぐにサイドバックへまわし、ウチのDFの裏へロングパスを入れる形で攻めてきた。ウチは持ち味が出せず、シュート数で4対13、得点は0—3で敗退した。

すぐに四五期諸君とミーティングを開き、一年後の高校総体に向けての年間計画を話した。守備に重点を置き、中盤のコンビネーションプレーから両サイドへ展開して攻撃を仕掛けるチーム作りをスタートした。新たな高校の指導体制も打ち出した。

⑤一年後の九六年五月一二日は、高校総体の三回戦に進出し、シード高の翠嵐高校と対戦した。

前半は相手の猛攻をしのいだが、終了5分前、ひざでクリアしたところをキーパーへのパスとして反則に取られ、フリーキックを決められた。後半はウチから攻めにいったが、ロングパスで逆襲され、DFのミスも絡んで、0—3で負けた。

選手は体をはって守った。しかし、攻守の切り替えを選手全員が連動して行うことや速攻と遅攻とを使い分けるトレーニングが不足していた。

⑥九七年の高校総体は、二回戦でシード高の横浜東高校と対戦した。

九六年の夏の大会では、0—5で敗れ、春休みの練習試合は0—0で引き分けた。東高に借りを返すことも目標だった。

五月五日は、前半はウチが積極的にボールにプレスをかけて、中盤で奪ったボールを素早くサイドへまわして攻撃を仕掛けた。守るときは4—4—2で、攻撃は右サイドの速い選手をいかし4—3—3に近い形にした。相手は3—5—2でサイドにスペースが出来る。そこを狙った作戦だ。PKを含め、4回は決定的チャンスを作った。

しかし、0—0で後半に入り、東高が積極的に仕掛けてきた。早いサイドチェンジで揺さぶり、積極的にドリブル突破をねらってきた。ウチはそこを2人で追わせて守備的に戦った。後半だけで8本のコーナーキックをしのぎ、ゴール前ではフリーにさせなかった。

結果は、後半一八分と二〇分にペナルティーエリア前にいた中盤の選手に振り向きざまのシュートを決められ、0—2で敗退した。

試合後の四六期の選手達は、さばさばとした表情で、冷静に試合内容を分析し、反省点を挙げていた。静かに次への課題を語れるのは、「勝ちたい」ために必死に考えてプレーしたからだろう。

⑦九九年は、高校総体の四回戦に進出し、雨の中で秦野高校と対戦した。

一年にわたって、ラインディフェンスに取り組んできた成果がやっと出てきたところだった。相手も同じシステムで、ラインディフェンスで守っていた。DFからパスをつないでサイドの突破をねらうことも一緒だった。

しかし、シュート数で4対19、CKで1対12と一方的に攻められた。前半に、相手のFWをマークしていたDFのプレスがあまくなり、ポストプレーからのカベパスでシュートまで持っていかれ、2点失う。後半は守備面を修正し、カウンター攻撃から1点返す。直後にカウンターで失点し、結果は1—3で敗れた。

⑧二〇〇〇年五月七日に高校総体の三回戦で茅ヶ崎北陵高校と対戦した。

同じ地区で、新人戦の試合などを観ているため、お互いの手の内はわかっていた。それでも、北陵高の激しいプレスと、ワンタッチパスによる素早く、パワフルな攻撃に防戦一方となった。

ウチの守備陣は、長いタテパスやクロスを相手FWと競り合って、こぼれ球にもしつこくプレスをかけた。しかし、前半一〇分過ぎに、くさびのパスを受けに行った相手FWと激しくぶつかり合ったとき、PKをとられて先制される。その後も相手のシュートは2〜3人で囲んで、枠には打たせなかった。後半に一度だけ、マークがずれたところをヘッドで押し込まれ、2点目を奪われる。ウチは、3トップだったが、相手のDFに対してプレスがあまく、ロングパスの出所が押さえられなかった。

試合後の選手は、もうぐったりしていた。控えの選手やサポートの部員も、涙するものがたくさんいた。後一歩だった。

⑨二〇〇一年五月十三日、十一時キックオフで、桐蔭学園との試合が始まった。

これは高校総体の四回戦で、これに勝つと県の上位二六校になる。高校総体は、五月中にベスト8までを二〇〇校以上で競うのである。

相手は、U—17日本代表選手が一人、県選抜選手が三人いる。優勝候補の筆頭である。ウチのチーム力がどこまで通じるか、全力を尽くして勝利のために戦うだけである。

開始一〇分間で、立て続けに3失点した。相手は全力である。

試合の大勢が決まったかのような状況になって、やっと全員が守備に目覚め、中盤でボールを囲んで奪う形が出せるようになった。攻撃も左ハーフが積極的に動いたため、あわやPKという場面やゴール近くでのフリーキック、相手DFと1対1でのシュートチャンスがつくれた。

しかし、前半は、まだ攻撃への切り替えがあまかった。ボールを奪った後のパスをカットされ失点を重ねた。0—5と大差をつけられた。

後半に向けては、いつものようにサイドから攻撃を組み立てることと、サイドチェンジをいかすことを指示し、守備の動きを確認した。それでも、後半のウチのゴールキックが8本、相手のコーナーキックが4本で、3分に1回以上、ウチのゴール間際まで攻め込まれている。逆に攻め込む機会も増え、高二や高一の元気な選手を交代出場させてからは、パスで抜け出しGKを目の前にしてシュートする形も作れた。結果は0—5のまま終了した。

試合前の打ち合わせでチームの意志統一や連携プレーの確認をやれば、これほどの失点をせずに、得点チャンスにパワーが出せたに違いない。『やれること』を『やりきらず』に負けたのだ。これほど悔しい負けはない。

我々には、もっと『やれること』があるはずだ。それを確実に『やりきる』ようにできるはずだ。もっとサッカーを追求することができるはずだ。鍛えなおしである。